

# 會報

第三号（通号八〇）

平成三十年三月三一日発行  
〒一五六一八五五〇

東京都世田谷区桜上水三丁目四〇

日本大学文理学部史学研究室内  
FAX〇三一五三一七一九二二八

## 史学科左見右見

学科主任 粕谷 元

皆様は「初年次教育」という言葉をご存知でしょうか。それは、文部科学省の一つの定義によれば、「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム」です。一九七〇年代のアメリカで発祥したもののですが、日本の大学でも二〇〇〇年代に入つて急速に導入が進み、今や初年次教育を行つていない大学を見つける方が難しい時代になりました。わが日本大学文理学部でも初年次教育が二〇〇九年に導入され、史学科においては一クラス三、四十名規模の「歴史学入門ゼミナール」（必修科目）として開講されました。史学科の複数の専任教員がこれを担当し、私もその一人として、新入生に対して大学生（史学科生）としての意識付けを行うとともに、レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方など、大学での学びに不可欠な技術を実践的に教えていました。

名称の是非はさておき、バブル時代に学生時代を過ごした私の目から見れば、今の学生は将来を展望することが難しい時代状況を反映してか、総じて真面目で堅実です。そのような学生たちに対する初年次教育の責任とやりがいを、「歴史学入門ゼミナール」、さらに

いました。

さて、この「歴史学入門ゼミナール」が、およそその中身はそのままに、二〇一六年度から「自主創造の基礎」という耳慣れない名稱に変わりました。そこで当然、「自主創造」とは何ぞやという話になるのですが、本学HPでは、「自主創造型パーソン」を育成するためには、「自主」性を涵養し、「創造」性への導入を目指した全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎」を全学部において一年次に展開します」と説明されています。ご存知の方もありますようが、「自主創造」は本学の「目的および使命」の中に表れる言葉で、二〇〇七年に正式に本学の教育理念とされました。(つまり、教育理念がそのまま科目名になつたわけですが、「大学生（史学科生）としての意識付け」はともかくとして、「大学での学びに不可欠な技術」の修得のための授業の名称としては、「歴史学入門ゼミナール」の方がわかりやすかつたという感は否めません。そもそも「自主創造」に基づいても応用もないだろうと思いますが、実は「自主創造の基礎」では日本大学の歴史も学ぶことになっていて、そのことからわかるように、この初年次教育科目は愛校心教育も兼ねています。そうである以上、「自主創造の基礎」という科目名は他に代えがたいのでしよう。

「自主創造の基礎」を毎年担当するたびに感じています。

「史学科左見右見」と題する本欄は、学科内の人間が史学科の最近の様子などを伝える欄として前号から設けられたのですが、二〇一七年度の史学科では、現役教授の大塚英明先生を失うという大変大きな出来事がありました。先生の急逝は、まさに青天の霹靂でした。痛惜の念に堪えません。本号には大塚先生とくに近しかつた方が追悼文を寄せてくださいました。拝読いただき、在りし日の先生を偲ぶよですがとしていただけ幸いです。

## 訃報

史学科教授 大塚英明先生（昭和四五年度卒）は、平成二十九年七月一七日、逝去されました。哀悼の意を表し、謹んでお知らせいたします。（享年六九歳）

### 点描大塚英明先生

上保 國良（昭和四四年度卒）

### ○「松陰」と「松蔭」

学科代表に仰せ付かって後任の助手候補の大塚英明氏の「履歴書」等を学部長に届けた時の一コマである。部長は単に配達人にすぎない者に向かって「吉田松陰」の「陰」には草冠は要らないのかと言われ、即座に要らないと思いますと答えると、そうかの一言。確かに

に先の答に反する資料は得られないでの一先ずは安心。ところが、昨今、岩波文庫の『松蔭日記』（柳沢吉保の側室の手になる日記文書【まつかげにつき】）を目にする度にあの「そうか」が思い出されて悩ましくなる。この話柄、大塚氏には早く伝えて、その処方箋を聞いておけばよかったのだが。

### ○「BBC」と「CCレモン」

大塚先生は学生の就職のことを考えて英國の放送局名はつけないことにしていると公言していた。一方、「CCレモン」と一部の院生に自嘲的に言わしめたのが我が身である。「学生思い」ということではとても勝てる相手ではなかつた。

### ○「お汁粉」と「薄皮饅頭」

大塚先生は、よく○○ちゃん・○○ちゃんと言つて東京駅で買ったきた「甘いもの」を彼女たちにプレゼントしていたが、自らは口にしないようであつた。しかし、寒くなり自販機に「お汁粉」が出るとこれを飲んでおり、さらに福島県郡山市柏屋の「薄皮饅頭」だけは別だつたようである。これは郷土愛とのこと。一方こちらを評してスワイート・ゼミのボスと言つて「ヘルシア」を紹介してくれた。有り難いものである。

### ○「イケメン」と「コイケメン達」

大塚先生が「イケメン」と自称していたことは、先生から博物館の優待券を貰つたという人から聞いた。退校時にこの「イケメン先生」と「コイケメン」の面々が一緒になると桜上水駅まで歩くのが速いこと速いこと。老人や女性軍を置いてき堀にして、先生御一行

の愛煙家は駅前の喫煙コーナーの主と化すのである。したがつて駅まで話しながら帰るのは稀のことであり、話は電車に乗つてから始まるのが常であった。

### ○「我が社」と「巨人軍」

一番多かったのがこの話題である。先生がスマートフォンを見て「我が社は勝つた」と言えば遠藤関のことであり、午後七時前後のことなので、多少大声で「勝つてる」とか小声で「負けてる」と言えば「巨人軍」ことなどであつた。

### ○「世田谷線の仲」と「安政の大獄の仲」

東急世田谷線の「松陰神社前」駅と「宮の坂」駅。前者は文字どおりの神社であり、後者は井伊直弼の墓所がある豪徳寺の最寄駅で、この寺には両親や親戚が眠っている。となると大塚先生との仲は親しかつたのか如何に。

大塚英明先生、紙数が尽きたようです。たいへんお世話になりました。安らかにお眠りください。一先ずはこれにて。また何処かで。

## 大塚先生の思い出

加藤 直人（昭和四八年度卒）

一九七六年、上保國良先生が三島キャンパスへと移られたあと、大塚先生は本学の助手となられた。当時、史学科はちょうど創立五〇周年事業や、研究室の移転（以前の本館3階から研究棟（現在の二号館）へと）作業の一番忙しいときであった。高村隆先生（元

日本大学生産工学部教授）とのコンビでこの難局を見事に切り抜けられた。一九七八年、先生は突然、文化庁美術工芸課へと転出された。日本近代史専攻の大塚先生が、文化財、美術工芸の部門への転身は大変であったと思うが、見事にわが国の文化財行政を担うひとりとして活躍されることになった。

私事になるが、一年をおいて大塚先生の後任として赴任したとき、助手という職務がよくわからなかつたので、大塚先生の住む千葉市まで行つてアドバイスをいただいた。先生の助手時代に苦労されたお話しや諸事対応法についてのご教示は、私にとって、きわめて大きな宝物となつた。

その後、先生とは親しくお付き合いしていただき、先生の結婚式にも参加させていただき、お手伝いをさせていただいた。先生からは、人との付き合い方、酒席での対応等、社会で生きる上での貴重なお教えを受けた。また、松村潤名誉教授が勲章を受けられた際にも大塚先生から多くの助言をいただいた。賞勲局のルールから申請書類の書き方にいたるまで、懇切丁寧にお教えいただき、おかげで勲三等を授与いただけることになつた。これには感謝の言葉しかなかつた。

先輩である三輪嘉六先生が九州国立博物館設立のために史学科から異動されたのち、大塚先生を本学学芸員課程の専任教師としてお迎えすることになった。某有名大学からもお誘いがあつたようであるが、本学へ来ていただいたのは幸いであった。就任以来、多くの学生を学芸員として養成・就職させていただき、文理学部資料館

の立ち上げ（学芸員課程学内実習施設の確保）にも尽力いただいた。

学内実習のためには、同資料館が博物館相当施設として認定される

必要があった。先生は、認可所管の東京都と粘り強く交渉され、それを成し遂げられた。それには、わが国の文化財関連分野において

きわめて大きな存在であった大塚先生の「顔」も大きな役割を果たしていたことはいうまでもない。現在、この資料館では、毎年一〇〇日以上に及ぶ各種展示がなされており、文理学部の「顔」として

社会に認知される存在となっている。この他に、日本大学旧総合学術情報センター所蔵の古典籍にも目を配られ、複数におよぶ重要文化財の指定に尽力されたことも忘れない出来事である。学内においては学芸員課程の中心として、そして外においては国際文化財審議会委員として、文化財行政にもきわめて大きな役割を果たされた。

先生はたばこが好きで、よく一号館裏の喫煙場所で学生や職員と談笑されているお姿を拝見した。たばこは身体に悪いので、やめてくださいとお話ししたこともあるが、先生は必ず「イアーッ」と笑つて紫煙をくゆらせていて。手術される直前、二号館のエレベーター前でお目にかかるとき、ちょっと先生の顔色がすぐれなかつたので「大丈夫ですか」と申し上げると「これからちよつと切つてしまふよ…」と話されたのが、先生と私の最後の会話であった。先生の教え子たちは各所で活躍し、先生が指定された文化財はこれからも日本の宝として生き続けていく。ただ、私個人から言えば、もうすこし先生と一緒に飲みながら、いろいろな話しを伺いたかった。今

はただただ残念の言葉しかない。

## 大塚先生を偲んで

小原 愛（平成一七年度卒）

大塚英明先生を初めてお見かけしたのは大学二年の春、「博物館概論・経営論」という学芸員資格を取得するための授業でのことでした。

私が学生時代には大塚先生が担当していた文化財ゼミナールは存在せず、先生との接点は主に学芸員資格、文化財。

それは私が平成二一年六月に臨時職員として学芸員課程研究室に勤め始めてからも同様で、大塚先生との接点は「学芸員課程研究室」というただ一点に集約されているのだなとしみじみ感じます。

その学芸員課程研究室で、唯一の事務員として平成二八年一二月末までの七年半勤務していた私と大塚先生とは、教授と事務員として一対一で接する機会が一番あつた立場だったのではないかと思います。

研究室に二人でいる際、仕事の話をするかたわら、自分の話、家族の話、美味しかった食事の話、今日面白かった話、つまらなかつた話、色々な話を大塚先生とはしましたが、そのような雑談を交わせるようになるまで、働き始めて半年以上はかかりました。

くだらない意味のない話で初めて言葉のキヤツチボールができる、その感慨深さは、胸に焼き付いております。話の内容は、まつ

たく覚えていないのに。

いつでも学生とおしゃべりすることを楽しみにしていた方で、面には出さないまでも、卒業生が訪ねてくるのをとても喜んでおられた姿が今でも思い出されます。

一人で事務を担っている私をとても気遣つてくださり、美味しいお菓子の差し入れ、季節ごとの食事など、折に触れ、可愛がつていただきました。特に食事に関しては「食べる」とも勉強だと、自分ではとても行く事のできないようなお店に連れて行ってくださったことは、得がたい経験です。

愛煙家であった大塚先生が、うなぎを食べに行つたときだけは食後まで煙草を我慢なさつていて、そこまでうなぎがお好きなのかと驚いた覚えがあります。しかしその後、大塚先生と長年の付き合いのある他の先生から、「大塚先生、昔はうなぎが嫌いだったと思うけど」と聞かされ、更なる驚きにみまわれたこともありました。

結局、うなぎに関する真相は聞けずじまい。

とてもメールにマメな方で、私の友人知人含めても誰以上によく連絡をとつてくださり、いつでも思い出したときにお話を聞けると思っていたのがあだになってしまいました。

まさかこんなに早くお別れすることになるとは思わず、職を辞しました今でも時折研究室には顔を出しておりますが、ふとした瞬間に大塚先生がひょっこり姿を見せるのではないかという感覚が今でも拭えません。

大塚先生が常日頃おっしゃっていた言葉は、「筋を通せ」。

仕事にしろ私事にしろ、これが一番大事なことだと、七年半、様々な形で教えられました。

それをどんな場面でも実現できているか、これからもずっと、見守つていてください。

心より、ご冥福をお祈りいたします。

### 恩師大塚先生との思い出

竹ノ内（三本） 悠（平成一九年度卒）

大塚先生と初めてお話をしたのは、私が大学二年の秋でした。三年から始まるゼミナールを決めるため、新しく設けられた文化財ゼミナールではどのような研究ができるのか、直接先生にお聞きして学芸員課程研究室へおうかがいしました。授業は受けていたものの一対一でお話するのは初めてで、研究室の雰囲気もありとても緊張していましたことを覚えています。直接お話しした印象は、少し怖くて優しい先生という矛盾したものでした。その印象は、その後十年間お世話になつた今も変わらないように思います。先生は、言葉で厳しいことをおつしやつても、いつも優しい目で、弟子として部下として私を見守つてくださいました。

文化財ゼミナールでは、授業後も教室で先生から文化財指定に関わることなど色々な話をお聞きしました。東京国立博物館へ連れてついてくださり、修復士の方にお会いすることもあり、とても貴重な体験でした。私が大学院へ進みたいとご相談した際は、

研究の道の厳しさを説かれ何度も玉砕することになります。最後まで了承の言葉をいただけないまま、私は押しかけで大学院へ進んでしまいましたが、それでも先生は、いつもさりげなく助言し導いてくださいました。今思えば、このような頑固な弟子に、さぞかし先生はお困りだったことでしょう。

大学院でもマイペースなままで、修了後のことまで不明確な私ではありました。大変ありがたいことに日本大学文理学部資料館で働けることになり、その後さらに六年間、副館長であった大塚先生の元、学芸員としてお世話になりました。部下としては、学生であつた時の何倍も先生を困らせたことと思います。問題があれば一緒に悩み、展示開催が迫れば一緒に資料を並べ、本当に多くの時間を過ごしました。何か新しいことを始める時、先生は厳しい言葉で反対されることがあります。しかし、それで終わるのではなく、後日「あれから考えてみたが、こういうのはどうだ?」とアドバイスをくださいます。いつも資料館や私たち学芸員のことを考えてくださいました。

学術論文の一本も書かず、とても不出来な弟子であつた私ですが、先生の退官記念として史叢に掲載するお話をいただきました。先生のお名前に泥を塗らないよう、先生に少しでも恩返しができたらと思ひ執筆を進める中、先生の訃報が届きました。その直前まで、論文内容をご相談し連絡を取り合っていた中でのことで、未だに実感がわきません。論文の草稿を渡した際の、「じっくり読んで返事をする」という約束は果たされないままとなってしまいました。もう

少し、不出来な弟子の面倒を見ていただきたかったと思いつつ、「だからもつと早く書けど、いつも言つていただろう」という先生のお叱りの言葉が頭に響きます。  
先生とお会いしご一緒できた時間は、私にとって本当に素晴らしい大切な時間がありました。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



写真

日本大学文理学部学芸員課程研究室

## 史学科の昔と今

### 〈恩師探訪〉

——昨年に続き「恩師探訪」のコーナーでは、早い時期のご卒業で、戦後の日大の日本近世史分野にご尽力をいただいた横山則孝先生にお話をうかがうことにしました。先生は商学部の教授として教鞭をとられ、当学科でも長期にわたり非常勤講師を務められ、「古文書・古記録学」の講義を担当されておりましたが、平成二九年度をもって非常勤講師の職を退職されるところとなりました。お忙しい所をありがとうございます。まず入学した頃の様子や大学の雰囲気はいかがでしたか？

(横山) 私が日本大学史学科に入学したのは、昭和三六年（一九六一年）四月です。前年は東大の女子学生が死亡したりした安保騒動で大変な年でした。当時史学科では卒業生が中心となつて編集した『石田・和田・龍・山中四先生頌寿記念論文集』のことがよく話題となつており、こんなに素晴らしい先生方がおられたのかと思つたことをよく覚えております。

和田清先生のお姿は見ることがついぞなかつたと思いますが、他の三人の先生方は今でも忘れられない強力な印象を持つております。例えば新入生歓迎会に出席された石田幹之助先生が羽織袴姿（普段もそうであった）で、世界的な大学者であるという雰囲気がかもし出されているという感じですね。龍肅先生は、秋の文理学部

学術研究発表会で、閉会の辞をのべるにあたつて、当日は生憎の強風が吹きあれていたわけですが、先生は、「最近、文永の役（一二七四年陰暦の十月）の際、風（いわゆる神風）は吹かなかつたといふ説をなすものがいるが、今日の風をみれば、そんなことはない。最近百年程の統計だけでものをいうのはどうか。」と言われました。会場は大変わきましたね。知的な興奮を覚えたことを今更のごとく思い出します。私は大学で「日本史概説」を担当する時に学生にはこの話に言及することにしております。

——どなたか記憶に残る授業はございましたか？

(横山) 山中謙一先生は大学二年からずっと西洋史の講義を拝聴しましたが、先生の真面目そのままを体現された授業でしたね。学生の間に自主的に「静かに授業を聴こう」といった雰囲気が大変強く出ていました。でも辛かつたですね。何しろ当時は携帯もスマホもない時代ですので、授業を聴かない学生は眠る以外は隣の学生とおしゃべりをするしかないので。大学の授業は一般的にかなり騒がしかつたと思います。その後に私は大学院に進学したので、山中先生の辞書を読む講義を何回も経験しましたが、時には一対一になることも多く、予習が大変だったこともなつかしいですね。先生を失望させることはできないという思いでした。

——それなりに眞面目だったわけですね(笑)。ところで先生が日本

**近世史研究を目指されたのはどうしてですか？**

(横山) 四月に入学して、すぐ学生の研究会の紹介がありました。

当時は考古学研究会と日本近世史研究会が盛んだつたと思います。私は四月末の連休を利用して行う栃木県の古文書調査(近世史研究会)に参加いたしました。はじめて現地で「地方(じかた) 文書」なるものを拝見したわけですね。農家の蔵のタンスに多数収められていました。上級生から一枚渡されましたが、ちんぶんかんぶんです。他人に迷惑をかけてはいけないと、読んでいる振りをして時間が過ぎるのを待った記憶があります。荒居英次先生は学生が質問した文字については、これはこの文字だとすぐ返事をされておりましたね。少し離れてみていて専門家の凄さといったものを垣間見る思いでした。この合宿で上級生の北原章男氏(後、日本大学法学部教授)と知り合いになつたことも私の財産の一つとなりました。

**——指導教授の先生たちの人柄や就職の機会はどうでしたか？**

(横山) この栃木県の古文書調査は杉本勲先生(後、九州大学教授)

代表のもとで、福田芳郎・藏並省自両先生の参加をえ、さらに卒業生で当時東京大学史料編纂所におられた進士慶幹・村井益男両先生、そして荒居先生らが中心となつて進めておられ、学界でも注目されておりました。

学部学生である私は研究の中核に参加することはなかつたのですが、身近に研究というものを感じさせていただきました。ここに

集まつておられた諸先生とはその後永く近世史研究者としてご指導いただきました。

特に近世の武家研究家として知られている進士先生のご指導を受けることができたのは、その後同じような分野を専門ときめた私にとっては欠くことのできないものでした。村井・荒居先生とも他大学の研究者と面識をもつことができるようはかつていただけたり、さらに荒居先生には文理学部講師出講の機会を与えていただきたり、感謝の他ありません。これも日本大学史学科に入ったご縁を深く感謝いたしております。

——本日はありがとうございました。

(質問者・文責 関 幸彦)

### 〈現役学生の声〉

西洋史ゼミナール(坂口明先生・前近代史)

博士前期課程一年 廣田 和真

**——坂口先生のゼミの雰囲気はどのような感じでしょうか？**

(廣田) 雰囲気はとてもいいですね。人数も三・四年生合わせて、十五人程度と丁度良いのではないかと思います。毎回二名、各自の卒論に向けた発表をして、時間が余つたら英語文献の講読というスタイルです。ですが議論が活発なので質疑応答で時間がいっぱいに

なつてしまい、講読する時間が多いですね。合宿をした  
らさぞや楽しかつただろうなと思います。

——適度な人数で活発なゼミなのですね。坂口ゼミは西洋史、それ  
も前近代のゼミということですが、学生たちには特色などはあるの  
でしょうか？

(廣田) みんな個性豊かです。趣味の音楽のために海外留学する  
人がいたり、毎度天然な質問をして笑いを誘う人がいたり。良い意  
味でまとまりがないですね。坂口先生もそれを是とされているので  
はないでしょうか。もちろん仲が悪いというわけではなく、坂口先  
生も誘つてコンパを開いたりもしました。

ローマ史とギリシア史の割合は七三くらいです。みんな海外旅  
行好きだったようで、長期休みにギリシア・ローマに行く人もたく  
さんいました。ちなみに坂口先生は、イタリア人の悪口と言つては  
まずいと思いますが、イタリアでの苦労話を語らせると話が止まり  
ません。バスの不親切さや、観光客をターゲットにした詐欺師や偽  
警官の話などを軽妙な口ぶりでなさつていたことが印象的です。も  
ちろん必見の博物館や遺跡のことと細大漏らさず教えてください  
ます。とにかく実地に行く人間にとつて役立つ楽しいお話をたくさん  
伺えたのは大変ありがたいですね。

——坂口先生お得意のユニークなブラック・ジョークは健在のよう  
ですね。師弟共々個性派ぞろいの坂口ゼミですが、そんな皆さんの

#### 卒業後の進路については、何か傾向などはありますか？

(廣田) 僕の代は教員を目指す人が三割、民間企業を目指す人が  
六割といった感じでしようか。公務員、学芸員、司書志望は少なく、  
進学は自分一人でした。やはり西洋史専攻と言うだけあって、海外  
志向の人が多くたったようで、旅行会社志望の人もたくさんいました。  
世界遺産検定を受ける人も目立っていました。

——さて、それでは研究関係の質問に移りますが、廣田さんご自身、  
西洋史を学ぶ上で特に苦労した点などはありますか？

(廣田) 一番は外国語ですね。文献の入手がやや面倒と言う面で  
も。単純に読むのに苦労すると言う面でも。

日大の図書館ではまず揃わず、外部の図書館で取り寄せられれば  
まだいいのですが、国内の図書館ではそう置いてない本もあります。場合によつては自分で購入するしかないわけですが、それで  
も一冊は洋書を買って読むことを坂口先生はおすすめされてまし  
た。洋書をじっくりと一冊読むのは良い経験になるし、将来、「お  
父さん・お母さんはこんな本を読んで勉強したんだよ」と言って子  
供に自慢できるからと。

ですが外国语の学術書を読むのは一苦労です。普段から語学の点  
で苦労するのですが、もつとも問題になるのはやはり卒論作成の時  
で、十二月頃には坂口先生はゼミ生の間でひっぱりだこになります。  
ですがどんな質問にも快く答えてくださいますね。

——大変親身になつてご指導下さる坂口先生のお人柄が伺えますね。そんな坂口先生ですが、最後に、先生の印象はどうでしょうか。ゼミ入室当初から、実際に指導を受けて何か変化など、振り返つてどう思われますか？

(廣田)初めて西洋史概説の講義を受けた時から印象はかわりありません。坂口先生の講義は理路整然とした説明で誰にでもわかるような内容であり、なおかつ先行研究の紹介や史料の引用も豊富なので決してレベルを落としているわけではありません。ゼミでも同様で、基本文献や外国语の参考文献の書き方など、西洋史の卒論を書く上で大切なことは優しく教えてくださいます。自分は卒論のテーマを絞りすぎたので、最初先生に止められたのですが(後から思うと極めて正しい助言でした)、どうしてもそのテーマで書きたいとお伝えしたところ了承してくださり、先生のご指導のおかげで曲がりなりにも形にはできました。論文を書く上でこんなに頼りになる先生はなかなかいないのではないかと思います。

(質問者・文責 林亮)

○現在、私は大学院を出てから私立高校の世界史の講師として勤務しています。専門外の教科のために四苦八苦しておりますが、自身の勉強にもなるので精一杯勤めています。

研究テーマとしては、大学院時代から研究員となつた現在も引き続き、古代国家が支配領域外であつた東北地方をどのように支配していくのかを研究しています。目下のテーマとしては、伊治公皆麻呂の反乱を扱っています。これは古代東北史上最大の反乱であり、この反乱が在地社会や国家の東北支配にどのような影響を与えたのかを考えています。

今年七月一七日、史学科の発展に尽力された大塚英明先生が逝去されました。ご専門は文化財でしたので、出土文字資料(木簡・漆紙文書など)に関するご指導賜りました。新宿の喫茶店でビールを飲みながらレジュメを広げ、研究の指導を受けたことなどは良き思い出です。先生の学恩に報いるためにも、今後とも研究に邁進したいと思います。合掌。

昭和六〇年度卒 女屋 齋

を含め、およそ三六年もの長きに亘り、日本大学にお世話になっております。在学中はミルキーウェイというサッカーの同好会に入り、学生生活を満喫しておりました。文理学部キャンパス中庭で、よく練習していたのが思い出されます。今後も文理学部史学科を始め、日本大学の益々の繁栄を祈念しています。

## 近況通信

○日本大学の職員として、医学部で管財業務を担当しております。昭和六一年四月の入職時は歯学部、その後本部、芸術学部、理工学部、松戸歯学部への異動を経て、現在に至っております。学生時代

平成二〇年度卒 吉田 修太郎

## 平成二十九年度史学科行事紹介

四月 三日 ガイダンス開始（四月七日まで）	九月二二日 後学期授業開始（一月二七日まで）
四月 三日 文理学部開講式	一〇月一日 文理学部秋季オープンキャンパス
四月 八日 日本大学入学式（日本武道館）	史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほかに、中村順昭教授による特別授業「日本史の中の東国と西国」を行いました。
四月一〇日 前学期授業開始（七月二九日まで）	史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほかに、関幸彦教授による特別授業「ガリバーは、日本に来ていた？－海からさぐる日本の歴史－」を行いました。
七月一六日 文理学部夏季オープンキャンパス	史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほかに、関幸彦教授による特別授業「ガリバーは、日本に来ていた？－海からさぐる日本の歴史－」を行いました。
七月一八日 遺跡整備調査（八月一〇日まで）	長野県上川村国指定史跡大深山遺跡において、調査協力依頼により、整備調査が行われ、多数の学生が参加しました。
八月 二日 夏季休暇開始（九月二一日まで）	史学科では、学術研究発表会（史学部会）を開催しました。また、三日から五日までの三日間に文理学部の学園祭（桜麗祭）が開催されました。
八月 五日 東洋史ゼミナール合同合宿（七日まで）	二月 二日 冬季休暇開始（一月九日まで）
八月二九日 日本大学文輕井沢研修所において、加藤ゼミ、松重ゼミ、粕谷ゼミの合同合宿が行われ、一六名の学生が参加しました。	一月一〇日 卒業論文受付開始（一月一五日まで）
八月二九日 関ゼミナール研修旅行（八月三〇日まで）	一月三二日 春季休暇開始（三月三一日まで）
奈良県・三重県において、関ゼミの研修旅行が行われ、四六名の学生が参加しました。	三月一五日 卒業式（日本武道館）・文理学部学位記伝達式
九月 二日 遺跡発掘調査（九月一一日まで）	
南中野遺跡において、考古学実地研究の野外実習が行われ、二七名の学生が参加しました。	
九月二一日 後学期ガイダンス	

## 平成二九年度史学科データ一覧

### 史学科専任教員

日本史	中村順昭 教授	(日本古代史)
西洋史	関幸彦 教授	(日本中世史)
上保國良	教授	(日本近世史)
古川隆久	教授	(日本近現代史)
東洋史	加藤直人 教授	(東・北・中央アジア史)

松重充浩 教授 (東アジア近現代史)

西洋史	粕谷元 教授	(トルコ近現代史)
土屋好古	教授	(古代ローマ)
森ありさ	教授	(近代ロシア史)
		(アイルランド近現代史)

浜田晋介 教授 (日本考古学)

文化財学	大塚英明 教授	(文化財学)
		(東アジア考古学)

### 史学科研究室スタッフ

堀川徹	助手A (日本古代史)
山本興一郎	助手 (古代ローマ史)
鈴木麻里	副手・市川光祐
小島りら	副手・辻あや子
	副手

### 平成二九年度史学科非常勤講師数

五六名(大学院を含む)

### 平成二九年度史学科開講科目一覧

総合教育科目	半期七コマ
学科専門科目	半期一五二コマ
教職課程	半期二コマ
学芸員課程	半期二〇コマ
	通年二コマ(集中合)

### 平成二九年度史学科開講科目一覧

自主創造の基礎一 (旧歴史学入門ゼミナール)  
史学概論 (旧史学概論一)  
自主創造の基礎二 (旧史学概論二)

日本史入門

東洋史入門

考古学入門

日本史概説一・二

東洋史入門

西洋史概説一・二

日本考古学概説一・二

外国考古学概説一・二

考古学概習一・二

日本史基礎実習一・二

東洋史基礎実習一・二

西洋史基礎実習一・二

### 平成二九年度史学科学生在籍者数

学部生	一年生	二年生	三年生	四年生	合計
大学院生(M)	一四五名	一七九名	一四〇名	一五六名	六一六名
大学院生(D)	二年生	二年生	二年生	二年生	二四名
合計	二名	三名	三名	三名	八名

日本史ゼミナール	一
東洋史ゼミナール	一
考古学ゼミナール	一
文化財ゼミナール	一
日本史特講	二
東洋史特講	二
西洋史特講	一
考古学特講	二
考古学方法論	二
考古学実地研究	二
西洋史料研究	三
西洋文献研究	四
考古学概論	三
考古学実地研究	一
歴史民俗学	一
文化財学	一

## 平成二八年度卒業論文題目

- 現在の史学科学生はどのような興味・関心を持つていいのか、平成二八年度
- 卒業生の卒業論文の題目を一部紹介いたします。（順不同）
- 近代中国東北地域への朝鮮人移民の実態  
歌舞伎と芝居小屋から見た近世芸能
- リュクルゴス体制・エポロイからみるスパルタ国家の存在意義の考察
- 薙刀の変遷  
江戸上下水の機能と構造
- アイヌの信仰と祭具  
帝政ロシア末期の極右集団黒百人組について
- 九州地方古代における経塚の広がり  
呪いの形成とその政治利用について
- 北陸地方における横穴式石室について  
関東地方における弥生時代中後期後半以降の鉄器について
- 旧日本海軍戦闘機の研究  
武家棟梁論
- ヨーロッパ文化の広まりからみるイスラム社会  
中世ドイツにおける皇帝権と法皇権  
絶対王政期フランスにおける宮廷儀礼と王権  
一九六四年東京オリンピックと外交
- 陸上交通事業調整法について  
富士川合戦時の駿河武士団の動き  
帝政ロシア農奴解放前後の教育制度  
マテリオツチの布教成果の真偽について  
一九世紀末及び二〇世紀初頭のアメリカ移民の国民意識の形成要因について  
藤原氏の摂関政治創始の背景  
関東地方における縄文式製塩土器について  
弥生時代の漁撈活動の変化  
コンスタンティノープル陥落に関する史料学的考察  
鎌倉時代における西園寺公經の歴史的位置づけ  
室町期における新田岩松氏の動向  
日本古代の女帝について  
日本と中国の儒学変容  
ウイクトリア女神祭壇撤去論争に関する一考察  
第二次世界大戦直後の関東圏郊外におけるヤミ市と商店街  
一九二五年から一九三〇年までにおけるゲッベルスの政治活動と思想  
関東における近世期の志戸呂焼の流通について  
海軍大学校の教育とその変遷について  
クインティリアヌスの教育観と理想のローマ人  
太鏡における天皇狂氣説話について

# 日本大学文理学部史学科同窓会会則

平成二七年三月七日制定  
平成二八年三月五日改定

## 第1章 総 則

### (名称)

第1条 本会は、日本大学文理学部史学科同窓会と称する。

### (成 員)

第2条 本会は、日本大学文理学部史学科を卒業した者および日本大学大学院文学研究科史学専攻・日本史専攻・外国史専攻を修了した者（満期退学を含む）等ならびに史学科教職員を経験した者をもつて組織する。

### (目的)

第3条 本会は、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

### (事業)

第4条 本会は、第3条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- ① 総会および懇親会の開催
- ② その他目的達成のために必要な事業

### (会 計)

第5条 本会の会計は会費をもつてこれをまかない、会計年度は1箇年とする。  
期間は1月1日から12月31日までとする。

### (会 費)

第6条 本会の会費は終身会費5千円とし、入会時に納入するものとする。  
(その他) 本会の会員は、住所・氏名等に変更が生じる場合、速やかに届け出るものとする。

## 第2章 運営・組織

### (総 会)

第8条 本会は毎年1回総会を開くこととし、次の事項を行う。開催時期は別に定める。

- ① 運営・事業・会計および会計監査報告
- ② 役員の選出および承認

③ その他必要な事項

### (役員および組織)

第9条 本会は、次の役員により組織する。

- ① 会長 1名 ② 副会長 3名 ③ 理事 若干名 ④ 幹事 若干名
- ⑤ 会計監査 2名

### (役員)

第10条 本会の役員は、役員の職務は次の通りとする。

- ① 会長は、本会を代表する責任者として会務を総理し、必要に応じて総会・理事会等を招集することができる。
- ② 副会長は、会長が諸般の事情により職務を遂行できない場合にこれを代行する。

③ 理事は、総会の開催および諸事業の執行、会員の管理、通信連絡等の任に当たる。

④ 会計監査は、年1回以上の会計監査を行う。

⑤ 幹事は、理事会の要請により本会運営の補佐に当たる。

⑥ 理事会は、会長・副会長・理事をもつて構成する。理事会を年1回以上開き、本会の運営・企画・財務の管理および会員と役員提出議案の審議・決定を行う。

### 4 役員の選任方法

第11条 役員の選任方法は、次の通りとする。

- ① 会長および理事は、総会において定める。
- ② 副会長は、会長の指名により定める。

③ 幹事は、理事会において選任する。

④ 会計監査は、総会において会員中より2名を選任する。

### 5 会員の任期

第12条 本会役員の任期は1期2箇年とし、再任を妨げない。

## 第3章 付 則

第13条 本会会則の改定は、理事会においてこれを審議し、総会の承認をうるものとする。

第14条 本会の運営および諸事業にかかる諸経費は、これを有料にすることができる。

第15条 本会会則は、制定・改定日から施行される。



写真

日本大学文理学部図書館・資料館外観



写真

日本大学文理学部旧本館(手前)

日本大学文理学部新本館(奥)

## 編集部より

同窓会会報は今後、ホームページでの閲覧を基本とします。

URLは下記の通りです。

○近況通信を募集しております。ご寄稿を希望される会員の方は、本会報一ページ目記載の住所へご寄稿ください。なお、字数は二〇〇字以内でお願いいたします。

○住所変更等された場合は、本会報一ページ目記載の住所へ連絡下さい。なお、お電話でのご依頼は、聞き違い等の可能性がございますので、恐れ入りますがご遠慮いただきなく存じます。

### 〈編集後記〉

世代の「世」の旧字体は「十」を三つ。即ち「卉」です。学園紛争から三十年が経過し、世間も世の中も移り変わり、紛争の記憶も風化しつつあるようです。来し方と今、そして今を未来に。「会報」第三号も順調にお届けできること、一同喜んでいます。



平成29年度 日本大学文理学部史学科同窓会

2017年3月4日 於:アルカディア市ヶ谷

史学科同窓会ホームページURL

<http://www.nu-hist-d.jp>